

青少年期

生涯の胃癌リスクを低下させる対策としてこの時期の H. pylori 感染のスクリーニング検査と治療が考慮される。この時期は一般診療で対応することが難しいので、自治体等が施策として実施することが考えられる。

1. H. pylori 感染のスクリーニング検査は中学生以降であれば可能である

解説

年少児では、再感染のリスクが高く、抗体測定キットによる感染診断の感度が低い。一方、中学生以降では、抗体による検査も成人と同等の精度であり、感染のスクリーニング検査は中学生以降であれば可能である。中学生は義務教育であるため、自治体による施策として実施する場合、対象の把握が容易であり、高い受診率を期待できるので検査時期としては中学生が効率的と推測される。H. pylori 感染と確診された場合は、各地域の医療状況、年齢や体質に依存する除菌治療のベネフィットとリスク、本人や保護者の意向を考慮し、できるだけ早期の除菌治療が望ましい。なお、現時点では除菌治療は、小児には保険適用の範囲外である。

2. 青少年期の除菌治療は次世代への感染対策として有効である

解説

親になるまでに行う対策として、青少年期に除菌治療をすることは、家族内感染を予防し、次世代への感染対策として非常に有効で、わが国では再感染率も少ないことから確実性も高い。

出典：H. pylori 感染の診断と治療のガイドライン 2016 改訂版（一部改変）

ウ) ーii 検査と治療の同意について

市が実施する「中学2年生のピロリ菌対策事業」は非侵襲性の検査である1次検査においても同意を確認し、医薬品等を使用する確定検査・除菌治療については未成年者に対する検査・治療であり、本人及び保護者の十分な理解と納得が必要となるため書面による同意書の提出を必要としています。医師からの説明を十分に行い、本人と保護者がしっかりと納得したうえで希望することができる制度としています。

ウ) ーiii 対象者について

横須賀市に住民登録があり、検査を希望するすべての中学2年生が対象です。

【中学2年生を対象とした理由】

- ・ピロリ菌の感染期間を短くすることで将来の胃癌リスクを低減することが見込まれる。
- ・若年胃癌を考慮した年齢である。
- ・親子間の経口感染を防ぐため、出産(婚姻)年齢前である。
- ・大人と同じ薬量を使用するため、体重35kg以上が期待できる年齢である。
- ・受験期となる中学3年生以外とする。

コラム ピロリ菌の感染が分かった。ショック・・・?!

感染と聞いてショックを受ける方もいるかもしれませんが、しかし、早い時期に感染が分かって治療をすることで、胃がんや胃潰瘍になるリスクをかなり高い確率で下げることができます。不安なことはそのままにせず、ぜひ主治医にも相談してみましょう。

また、本人だけでなく、その家族もピロリ菌のことを知って対策できる機会となることも期待できます。

